

職員研修実施状況 H24年10月～12月11日

当センターでは、質の高いチーム医療の提供をめざして、様々な職員研修を行い、技術の向上と知識の蓄積を図っております。

実施日時	企画部署	研修名	講師	参加人数	場所
平成24年9月28日(金) 17:30～18:30	リハ・看護部合同	看護部・リハ部合同勉強会 「4Fフェニックス・NMCS事例から」	リハビリテーション部部長 彦田龍兵 看護部4階病棟主任 井ノ上智世	45名	PT室
平成24年10月13日(出) 9:00～16:00	看護部	重症心身障害児看護集中講座 II	小児外科部長 塩川智司 小児科医師 飯島禎貴 作業療法科科長 黒澤淳二	10名	2階自習室
平成24年11月20日(火) 17:30～18:30	看護部	重症児者の呼吸に関連する問題とケア	小児科部長 竹本 潔	100名	5階ホール
平成24年11月27日(火) 17:30～18:30	教育研修部	24年度上半期のインシデント報告の分析 今年のインフルエンザ対策	薬剤科科長 高瀬時義 小児科部長 竹本 潔	85名	5階ホール
平成24年11月30日(金) 17:30～18:30	リハ・看護部合同	看護部・リハ部合同勉強会 「3Fフェニックス事例から・療育 活動 生活援助」	作業療法士 飛地洋美 理学療法士 川崎美奈 看護部3階病棟主任 土井知栄子 介護療育部3階病棟主任 林 真弥	35名	PT室
平成24年12月4日(火) 17:30～19:00	経営会議	知ってみようポバース概念と私たちの組織 第1回 ポバースコンセプトの理解と応用	理事長 梶浦一郎	98名	5階ホール

NEWS

園歌「ひとりじゃないんだ」の作詞をされた加納由将さんの詩集DreamingWindow(夢想窓)が日本国際詩人協会新人賞を受賞されました！おめでとうございます！



イベントピックアップ

フェニックスクリスマス会

12月9日(日)今年もフェニックス・クリスマス会が盛大に行われました。利用者様の出し物や職員の劇、恒例になりました家族会のクリスマスソングコンサートで大いに盛り上がりました。おやつも豪華なクリスマスバージョンでみんなハッピーな1日でした。



栄養科のイルミネーションバイキング、五感を使って楽しむ食事療法！(右写真)

感謝

【寄付金と寄付物品】

大阪発達総合療育センターへの御理解・御協力誠にありがとうございます

寄付者(敬称略)	月日
楽基金 (14件)	10月
匿名	10月
楽基金 (15件)	10月
井上明生	10月
(株)コジマ 小島常男	10月
寺岡清	10月
楽基金 (7件)	11月
フェニックス家族の会	11月

寄付者(敬称略)	物品名	月日
長辻美喜	衣類	10月
認定NPO法人 難病の子ども支援全国ネットワーク	iPad、スヌーズン用品他	10月
匿名	バギー	10月



大阪発達総合療育センター

URL : <http://osaka-drc.jp>

【保険医療機関】 南大阪小児リハビリテーション病院
 【児童福祉施設】 南大阪療育園 障害児入所・通所支援事業(肢体不自由児) フェニックス 障害児入所・通所支援事業(重症心身障害児者)
 【指定訪問看護事業】 訪問看護ステーション めぐみ

〒546-0035 大阪市東住吉区山坂 5-11-21
 TEL 06-6699-8731 FAX 06-6699-8134

発行者・社会福祉法人 愛徳福祉会
 発行責任者・梶浦一郎

【児童福祉施設】 あさしお園 障害児通所支援事業(肢体不自由児) ゆうなぎ園 障害児通所支援事業(難聴児)

〒552-0004 大阪市港区夕風 2-5-3
 TEL 06-6574-2521 FAX 06-6574-2524

大阪発達総合療育センター

Osaka Developmental Rehabilitation Center
 保険医療機関 南大阪小児リハビリテーション病院

葦

大阪発達総合療育センター機関紙
 第8号 平成24年12月



社会福祉法人 愛徳福祉会 理事長

梶浦 一郎

■ 世界一からの発展

葦第7号で書きました「世界一の問題」の続きを少し考えます。どのような領域でも世界一は非常に大切だし喜ばしいことです。問題はそれをどうする、どう更に発展させるかだと思います。絶好調の時はどうしても上からの目線になり、本当のneedsが見えなくなります。いつの間にか周囲の状況と乖離し、気付かないうちに裸の王様になっていきます。私たちの仕事でも個々の障害児者に本当に役立つ仕事が出来ているのでしょうか。いつも自分に問いかけ、反省を繰り返すことが必要と思う今日この頃です。

■ 特集によせて

当センターでは、適切な医療を提供すると同時に、保健・福祉に関わる支援をおこない、地域の全ての方々が健やかに生活できる一端を担っています。個人に合わせた質の高いケアの取り組みを紹介します。重症児者では、胃食道逆流症や気管軟化症など複雑な病態を示すことが多くあります。その手術はとてつもなく繊細なものであり、高い技術が求められます。また、胃ろう部やカニューレ交換などの管理もいのちをつなぐ重要な役割です。昨年、淀川キリスト教病院から当センターへ小児外科医の塩川先生が赴任されました。胃ろうの手術や気管切開部のケアなど、重度な障害をもつ方々にとって重要な役割を同僚医師とともに担われています。HPS(ホスピタル・プレイ・スペシャリスト)が当センターで活躍され始めて4年になります。はじめは職員間でも聞き慣れなかった方も多かったようですが、今では、当センターに欠かせない存在になっています。子どもにとって「遊び」は発達、心理面においてもとても重要なことです。身体が動きにくい、手術で不安を抱えている…そんな子どもたちが夢中になれる時間を過ごせることはとても価値のあることだと思います。これからも対象者一人ひとりに寄り添いながら、センターに務める各職種が連携し、治療、発達促進に努めたいと考えます。

■ 廣島和夫先生が「高木賞」を受賞されました

当センターの整形外科医である廣島和夫先生が高木賞を受賞されました。第46回(平成24年度)「ねむの木賞」「高木賞」の贈呈式が、11月6日に品川のグランドプリンスホテル高輪において、日本肢体不自由児協会総裁常陸宮殿下並びに同妃殿下のご臨席のもとに行われました。思い起こせば、私自身も昭和49年に脳性まひ研究班として、また平成12年度には愛徳福祉会の代表としていただきました。今回、当センターから2人目の高木賞受賞となります。高木賞とは、わが国で初めて肢体不自由児療育の体系をたてられた高木憲次博士の御遺徳を永く記念するため昭和42年に設けられたもので、肢体不自由児療育の領域において顕著な功績があった者に授与されるものです。



“障がいをもった子どもたちのために”

当センターにおける小児外科の役割



大阪発達療育センター小児外科
塩川 智司

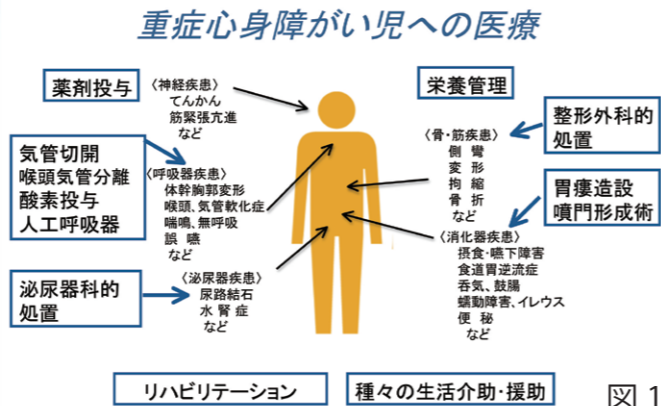


私たちの施設は、1970年に開設した肢体不自由児施設である聖母整肢園が始めで、1982年に南大阪療育園と改名し、2006年に重症心身障害児入所施設であるフェニックスが開設されると同時に、分院を合わせた組織全体の名称を大阪発達総合療育センターとしました。そして、今年2012年には保険医療機関名を南大阪小児リハビリテーション病院と命名されました。

当初、児童福祉施設と期待されて誕生した聖母整肢園以来、梶浦理事長が掲げた「障がいをもった子どもたちのために。子どもたちを医療で支える。医療で守る。施設に縛ることなくどこでも。」の精神のもとに40年余にわたり障がい児のための医療がなされてきた私たちの施設に、“病院”という名を初めて冠したのは意義深く、“医療で子どもたちを支える”私たちの向かうべき方向性が示されたものと感じます。

昨年10月、このような機運のなか、私は小児外科医として当施設に赴任させていただきました。私は1979年に大阪市立大学を卒業して、小児外科のある同大学の第二外科に入局しました。大学では小児外科のほか、心血管外科、肺呼吸器外科、食道・消化管外科、肝胆道膵臓外科、乳腺内分泌外科の患者さんを担当させていただきました。小児外科の特徴の一つである臓器特異性のない外科学の基礎づくりに、このような環境で外科医としてスタートできたことは私にとって大きかったと思います。卒後10年目以降は、小児外科を専従に大学で診療し、1997年4月に淀川キリスト教病院に赴任、当時小児科部長だった当センターフェニックス船戸園長と共に新生児を中心に、小児の急性期医療に取り組んできました。約30年間、疾患をもった子どもを治すために努力を重ねてまいりましたが、最近になって、障がいをもった子どもたちに関わるが多くなり、この子たちにはまだまだ光が足りないことを、ある児をとおして知り、障がいをもった児とご家族を少しでも支援できればと考えるようになりました。そして昨年、縁あり、ここ大阪発達総合療育センターに赴任いたしました。

さて、小児外科は、小児科が成人内科から分かれたのと同じく、成人と異なる小児特有の解剖学的・生理学的特徴と、疾患の違いから成人外科から分かれた比較的歴史の浅い外科学の一分野です。小児外科は、人の誕生から成人と変わらない思春期までの広い年齢を守備範囲とし、臓器特異性がなく、頭頸部顔面体表から消化器、呼吸器、泌尿器系の疾患に関わり、患児の病態を改善させることを術としています。また、経管栄養、静脈栄養も得意とするところで、このような小児外科の診療特性は、心身共に



デリケートな管理を要する障がいをもつ児の医療に適していると、今改めて感じています。

しかし、従来より肢体不自由児、重症心身障がい児施設は、整形外科およびリハビリテーション科の施設でありました。外科的治療は、主に骨筋肉、運動器に対してなされてきました。我々小児外科医より整形外科医はるかに多く、障がい児医療に関わってきました。小児外科医は、急性虫垂炎のような急性腹症や、腸閉塞などの緊急を要する場合に必要とされる程度でありました。ところが近年、新生児医療技術の著明な向上、医療機器の進歩によって、より重症な児が救命されるようになり、その結果、医療依存度の高い障がい児が増えて、我々小児外科医が関わる場面が増えてきました。障がい児のQOLを低下させている病態は図1のとおりで、体幹・胸郭の変形やそれに伴う喉頭・気管軟化症は呼吸状態を悪化させ、誤嚥は反復性の呼吸器感染症、肺損傷の増悪をもたらします。また、誤嚥は摂食障害、栄養障害を来たし、食道胃逆流症とともに障がい児のQOLを著しく低下させる病態です。これに対する外科的治療、すなわち栄養補給路としての胃瘻・腸瘻造設、そして、気管切開、喉頭気管分離術、胃食道逆流防止手術などがあり、これらの手術は障がい児のQOLを向上させ、療養生活の改善、リハビリの増進につながり、ひいてはより安心な在宅生活の可能性が拡がり、療育者のQOLにもつながりうると考えられます。これらの手術の適応判断や術後の管理、全身を含めた永いフォローアップが小児外科医に課せられた使命だと思えます。

療育センターの「障がいをもった子を医療で支える、医療で守る。施設に縛ることなくどこでも」の診療理念のもとに、小児科、整形外科、麻酔科ほか他部署と協働して、高度で温かな医療を提供するとともに、ご家族を支えてゆければと思います。



● イギリスHPS研修の中での学び ●



大阪発達総合療育センターにHPS (ホスピタル・プレイ・スペシャリスト) が誕生してから4年目を迎えた今年、

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト
市川 雅子



積み重ねがようやくじわじわとした変化を見せ始めてきました。現在、非常勤も含め6名のHPSが働く当センターの活動は、関西を中心とした重心施設にも、そして海外でのHPSチームにも知られ始めています。「子どもにとって、遊びは生きていくために必要なもの」「病院や施設の中であっても、遊びは守られるべき子どもの権利である」というのがHPSの考え方です。重い障がいを持つ子どもにとって、医療ばかりが優先されるのではなく、家族やきょうだいを含めた支援の一つとして「遊び」は重要であると言えます。私は2012年10月14日から2日間、イギリスにあるノッティンガムこども病院が主催する多職種による遊びを通した子ども支援のカンファレンスに参加し、HPSだけでなく、多職種によるサポートとその協働の実際について学びました。その中で特に印象に残ったのが、ユースサービス(若者への支援)です。ノッティンガムこども病院では「ユースサービス」として、小児病棟内に専用の部屋が確保され、医療と関わりを持つ11歳から25歳までの若者たちが、気持ちを共有しながら成長し、発達に応じたアクティビティや集いの場としての環境が準備され、ユースワーカーなどの専属のサポーターによって支援されていました。入院中だけでなく、退院後も継続したこのようなサポートは、子ども期からの病院や医療との関わりが、彼らが大人へと成長していく中で、ネガティブなものに変化していかないようにするためのものです。10月17日から20日までの4日間は、イギリス・マンチェスターで開か

れたEACH(病院の子どもヨーロッパ協会)の会議に日本のHPSとして参加させていただきました。入院前から入院中、そして退院後も含め、病院(医療に関わりを持つ)の子どもたちの権利を守るために活動する19団体の代表が参加する会議でした。EACHは『病院の子ども憲章』として、入院する子どもたちが置かれる環境について、子どもと家族の視点にたつて訴え続けています。このような会議に参加できたことは、大変光栄であったとともに、「子どもの権利」について、再度強い意思をもって活動をしていかなければならないと感じました。私たちが行っているHPS活動の一つ一つが、子どもの権利につながる大きなミッションであることを最認識した4日間でした。その後、イギリス南西部にあるプール病院で一週間のHPS研修を行いました。病院と隣接する子ども発達センターにおいて、障がいのある子どもへのHPS活動の実際を学ぶことが大きな目的でしたが、実際は全ての活動が、STやPT、OTなどのリハスタッフ、また栄養士などの専門職と協働する中で行われていました。約3週間のイギリス滞在ではありましたが、多くの刺激を受けたことはもちろん、私たちが目指していかなければならない方向性とその方法について、大きなヒントとなりました。



松石豊次郎教授の講演会

大阪発達総合療育センター 梶浦 一郎
理事長

平成24年10月21日に久留米大学小児科教授松石先生のRett症候群の家族に向けての講演会を開催しました。

参加されたのは33組(家族を含めて88名)で、うち13名が教授の個別相談を受けました。その他プレーリーの試着会、指文字によるコミュニケーション手段の経験談などに多数参加して頂き、大変盛況でした。

特に松石先生の懇切丁寧な個別指導には、皆様から感激したと喜んで頂きました。その他の方々からも、楽しかった、又このような会をして欲しいとの感想も聞きました。

松石教授、準備した職員の方々、参加された家族の皆様にご挨拶申し上げます。

